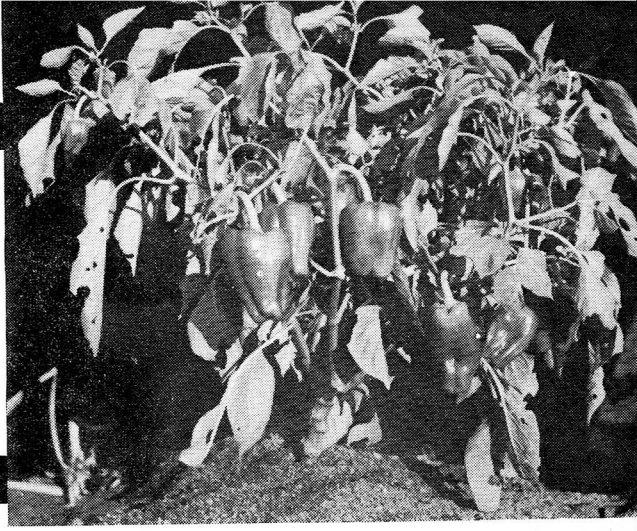
ピーマンの作り方

西村勝義



ピーマンは料理が簡単なことと、ビタミンA・Cを豊富に含んでおり、栄養価が高いことや、人によってもすききらいがないことなどより近年需要が非常にのびている。これにともない道内における生産出荷量も多くなっており、今札幌中央卸売市場に入荷した量をみると第一表の通りで、昭和三六年を一〇〇とすると、三七年一三八、三八年二五三、三九年三五六%と年々多くなっている。時期別入荷は六月～一一月まで道産品が入っており、そのうち九月、一〇月はほとんど道産もので、他の月は府県産ものが多く入荷している。

価格は第二表よりみても道産品の多く入荷する九月、一〇月は安く、ほかの月が比較的高い、従って道内で生産出荷する場合六～七月頃より出荷できるような栽培体型も考慮する必要があり、又、一一月以降の抑制出荷も今後おもしろい研究課題でもありましょう。

第1表　ピーマンの月別入荷量　（札幌中央卸売市場　単位キロ）

年別＼月別		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
36年	総量	432	616	1,012	1,343	2,239	11,716	22,721	20,952	22,407	6,837	2,681	2,591	94,499 枚 (1,044)
	道内	0	0	0	0	0	0	1,543	17,949	22,407	6,690	175	0	48,764
37年	総量	452	5,780	1,679	4,132	3,858	12,550	34,204	24,628	24,927	15,369	8,573	5,943	142,095
	道内	0	0	0	0	0	42	5,795	21,857	24,783	13,736	1,038	1	67,216
38年	総量	1,728	1,464	2,230	3,858	5,334	17,135	67,000	44,351	50,908	26,335	12,600	7,591	240,529
	道内	0	0	0	0	4	625	6,046	38,654	50,858	25,918	1,131	63	123,299
39年	総量	2,931	4,485	4,852	37,932	15,105	70,510	74,583	64,273	67,094	43,938	13,106	6,628	405,437
	道内	0	0	0	0	0	1,844	13,448	44,672	67,093	43,780	3,027	0	173,864
40年	道内	0	0	0	0	0	1,787	18,538	55,673	63,126	35,997	—	—	—

第2表　ピーマンの月別価格　（札幌中央卸売市場　キロ当り円）

年別＼月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
36年	—	—	205	150	179	110	89	43	20	35	173	204
37年	714	163	261	111	217	151	80	86	49	35	100	129
38年	321	319	420	332	305	176	84	64	22	25	87	184
39年	464	348	402	61	225	86	72	80	81	62	116	286
4年平均	499	276	322	163	231	130	81	68	43	39	119	200
40年（道産品価格）	—	—	—	—	—	114	140	91	44	59	—	—

備考　9月、10月はほとんど道産品であり、したがって価格も道産価格である。

一　経営の特性

ピーマンの労力は一〇ㄱ当り一〇〇人前後でこのうちでも収穫、出荷に約半分を要し、ほか育苗関係に二〇人、残りは植付け、中耕除草、追肥、薬剤散布などに三〇人を要する。

収量は株当り販売できる果は三〇個位で一個が四〇～五〇㌘の重量なので株当り、一・二～一・五キロ、一〇ㄱ当り三トンの収量となる。価格は九～一〇月は安くキロ当り四一円、八月は六八円と早出しが有利であり、八～一〇月の四年間の平均価格は五〇円となる。従って一〇ㄱ当りの粗所得が一五万円前後となり、生産費は労力を含めて六割は要するので純所得は五～六万円で一人当りの労働報酬が七百円前後となる。都市近郊の経営としては、株当り五〇円以上の粗収入を上げなければあまり有利な作物とはならない。

二　作物の特性

ピーマンは高温を好む作物だが、植物体は低温に対しても比較的強いが、一六℃以下では着果せず、又二〇℃以下で着果させても種子は少なく先尖り果になり、発育は十分でないのでハウスやトンネル栽培では定植を早めても被覆管理を厳重にしないと商品価値の低いものになるので注意する。又、高温が好むからといって四〇℃に一時間でもあわせると落花が起るので高温に対しても気をつかわねばならない。発芽の適温は三〇～三五℃、発育適温は二五℃である。

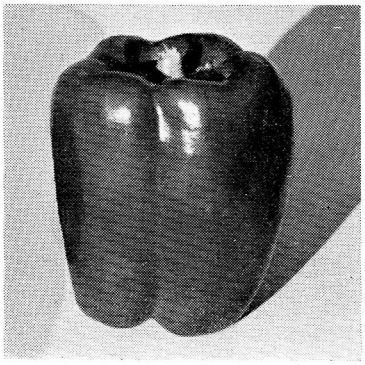
土質は早熟栽培には砂質壌土がよく、一般にはあまり土質を選ばないが排水のよい

夏季に乾燥のしない保水力のある耕土の深い土がよい。土壌酸度はPH六・〇～七・〇が最適で五・〇以下では石灰をまいて酸度をなおしてから栽培する。

三　品　種

たくさんでているが作付の多い品種を二～三上げると次の通りである。

㈠ **緑　王F1**…極早生、苗の伸長早く開花間隔短く落花も少なく一番果のとまりもよい。果は緑色で四角形であり道内では広く作付けされている。一五℃以下の低温では生育しないので定植を少し遅らせて大苗を植えることが、早期多収のこつとなる。



緑　王

㈡ **さつき**…極早生、草丈は矮性で横繁性であり、葉は小型で分枝早く五～六節で一番果がつく、果形は三～四稜で一果重は三〇㌘でやや軽い方だがカリフォルヤより収穫期は一週間位早いので早出し栽培にはよい。苗の小さいうちより開花を始めるので多肥栽培にして早めに収穫する。

㈢ **美鈴ピーマン**…早生種、低温伸長性で着果良[illegible]産型であり、果実はやや小型で厚肉、品質、揃いがよい。枝は横繁性で樹勢強く、早出し栽培などにも適し、本道の気象条件にあった品種である。

㈣ **カリフォルニヤ、ワンダー**…中生種、収穫期は緑王より一〇日位遅れる。果肉厚く、四稜の果形で短大果で草勢強く豊産型である。着果は上向きと下向の系統あり、普通栽培、抑制栽培用として広く用いられている。

四　育　苗

㈠ **播　種**…播種期は栽培目的により異なり収穫並びに定植時期より逆算して行なう。（第三～四表を参照）、種子は一〇㍍当り六〇㌘準備し、有機水銀剤の一、〇〇〇倍液に三〇分間浸漬消毒を行ない水洗いしたあと温床に六㌢幅の条播とする。覆土後発芽まで灌水をしなくてもすむように充分灌水し発芽までは床を密閉して保温につとめるが温度は芽がでるまでは三〇～三二℃を限界として管理すると、播種後一〇日位で発芽揃いになるので一㌢間隔に間引いて根元まで光線を入れてやる。発芽後の温度は二五～二八℃に下げ床内気温は地温よりいつも二～五℃換気により低くして管理する。

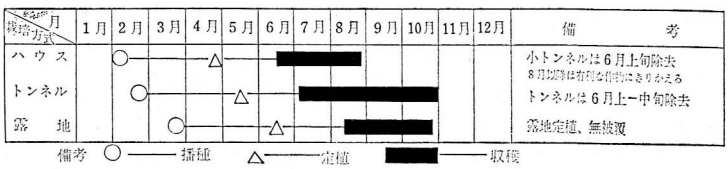
㈡ **移　植**…一回めの移植は播種後二五～三〇日で行なう。床土の厚さは一〇㌢㍍で距離は一〇×一〇㌢㍍とする。床の地温は元床より三～四℃高くすることが早く活着させるこつであり、活着後は元どおりにする。

第3表　ピーマンの育苗概要　（札幌地区普及所）

栽培型	播種期	第1回移植 移植期	第1回移植 苗齢	第1回移植 距離	第2回移植 移植期	第2回移植 苗齢	第2回移植 距離	定植 定植期	定植 苗齢	定植 距離	収穫期
				cm			cm			cm	
ハウス	2月上旬	3月上旬	本葉1枚	10×10	4月上旬	本葉2～3枚	15×15（又は鉢上げ）	4月下旬	本葉7～8枚	75×45	6月中～8月下旬
トンネル	2月下旬	3月下旬	本葉1枚	10×10	4月下旬	本葉2～3枚	15×15（又は鉢上げ）	5月中旬	本葉7～8枚	75×45	7月上～10月下旬
露地	3月下旬	4月下旬	本葉1枚	10×10	5月下旬	本葉2～3枚	15×15（又は鉢上げ）	6月中～下旬	本葉8～9枚	90×50	8月中～10月下旬

備考‥ハウス栽培は中にトンネルを設置した2重被覆とする。

第4表　ピーマンの作型



二回めの移植は第一回移植より二五～三〇日で本葉二～三枚の時期にあたり、この時期にポリ鉢（直径一八㌢㍍、高さ一五㌢㍍）にとっておくと定植のときに植え傷みを起さず活着も早まる。鉢とりをしない場合は床土の厚さ一五㌢㍍、移植間を一八×一八㌢㍍角に行ない、その後の温度管理は日中二五～二八℃、朝で一八～二〇℃が適温で、育苗中は一五℃以下に下げないようにする。二回目移植より二〇～二五日で本葉七～八枚になるのでずらしなど行ない、その後定植まで苗を本圃の環境になじませるようにし、夜間地温一四～一五℃、気温は一〇～一三℃まで下げ順次馴らして光を充分にあてて、植え傷みを起さぬような丈夫な苗に仕立てるようにする。

五　定　植

㈠ **本圃の仕度**…ピーマンは乾燥すると花の数も着果数も少なくなるので畑は堆肥などを沢山入れ、保水性をよくするようにする。トンネル栽培では定植予定の一週間位前よりビニールを被覆し、更にマルチを行ない地温を充分上げておくことが大事で、又、ハウス栽培は定植期が外気の低い時期なのでハウス内には小トンネルを設置し、夜間は孤をかけなければならないのでそれらの準備も必要となる。

㈡ **施　肥**…新しい枝をつぎつぎに分枝して結果するナスや、ピーマンは絶えず栄養生長しながら結果するので濃厚な肥料を一度に施さぬかぎりは多肥の害はなく水分、土壌条件がよく日照の十分な場合は施肥量に応じて収量はあがり、特に窒素と加里の吸収量が多い。一〇㍍当り四㌧の収量中の成分量をみると、窒素一四㌔、燐酸三・一㌔、加里一六㌔㌘も含まれていた。普通栽培の施肥量は窒素と加里が二〇～二五㌔、燐酸一五㌔、他堆肥三、〇〇〇㌔㌘が標準となる。施肥方法は堆肥など有機質系のものは全面散布とし、ほかの単肥は元肥に待ち肥程度を施し、追肥はな